

# 強さと弱さを支える地域の力

浦 光博 *Written by Mitsuhiro Ura*

.....  
はじめに  
.....

かつての地域社会は相互扶助の精神に満ちており、人々のつながりが緊密で、安らぎの場として人々を包み込んでくれた。それが今はどうだろうか。地域内での助け合いの精神と信頼感はすたれ、対人関係は希薄化し、かつては安らぎの源であった近隣関係が、しばしばストレスの元になることさえある。なぜ社会はこうなってしまったのだろうか。

答えは簡単である。人々がそれを望んだからである。いうまでもなく、ものごとには正負の両面がある。自発的な相互扶助といっても、実はその背後には相互監視があり、それを維持することへの強い社会的圧力が存在した。そして、緊密なつながりは、異質性や変化を容認しない排他的で閉鎖的な環境を作り出した。そのような窮屈な社会をわれわれが嫌ったのである。息の詰まるような人間関係はストレスに満ちている。またそれが人々の移動や社会の変化を阻み、個人としての、あるいは社会としての成長にマイナスに働くことも多い。だからこそわれわれは、そのような社会のあり方を変えようと努力を続けてきた。結果として、社会は発展し、人々は豊かになり、風通しのよい対人関係ができあがった。

しかしそれでもなお、社会はストレスに満ちている。心身に問題を抱える人々の

数が減る兆しは見えてこない。そして助け合いの精神が廃れた。何よりも、種々のハソビキッツップを持つ人々をサポートする仕組みが崩壊した。かつては、相互扶助の精神は人々の心の中に当たり前のものとしてあった。そしてその精神が、相互扶助の仕組みを自然発生的に作り上げる力になっていた。

そのような仕組みが崩壊した今、地域におけるサポートの仕組みはどのように再構築されるべきなのだろうか。ここでは、この問題について考えてゆくことにしたい。

.....  
強さをサポートする仕組み  
.....

他者からのサポートを必要とする人々を、地域でどのように支えるのかについて、ここでは大きく二つの視点から考えてみたい。一つは、人々





の潜在的な能力、自立的に行動できる力に焦点を向けたものであり、もう一つは、人々の弱さに焦点を向けたものがある。

まず、サポートを必要とする人々の持つ潜在的な能力を支える視点から地域のサポートシステムを考えてみよう。これは例えば、何らかのハンディキャップを持った人たちが潜在的に持っている力や、彼ら彼女らに残された能力を十分に発揮できるように、言い換えれば可能ながざり自立できるように支えようとする発想に基づく。地域精神医学者のキャンラン(一九七四)は、かつて、ある人が援助を受けるとか、援助を必要とすると考えることは、彼が弱いとい

うことを意味するようになり一般に受け取られてしまう。こうして見ると言葉というのはいかになものである。私が心に描いているのは倒れようとしていて人を支えることではなく、環境に対する自分の支配力を強めようとしている人の力を増強させることなのである」と述べた。他者を支えるということとは、その人を弱い存在、自立できない存在と見なして手をさしのべるのではなく、その人が自分の足で立てるように働きかけることだといっている。

このような発想で支え合いのシステムを作ることは、人々のやる気を引き出す上で効果的である。何よりも、根底に人間の力強さに対する明るい期待がある。自分たちのサポートが受け手の力を引き出し、その人たちが自立し、社会に対して有効に働きかけることのできる存在として生き生きと生活するようになる。それはサポートすることの直接的な喜びとなすて人のサポートへの動機づけを高めるだろう。

### シリアネットの活動を例に

一つの具体例として、筆者がある研究(和気・茨城・宮田・浦・野沢、二〇〇四)で関わった高齢者によるIT講習会での活動を見てみよう。

高齢者は情報弱者と捉えられることが少なくない。社会の高度情報化に乗り遅れた高齢者は、そのスピードに追いつくことができず、置き去りにされてしまいうに違いないという考え方である。このような高齢者に対して、同じく高齢者の講師たちが懇切丁寧にパソコンやインターネットの使い方を教えるという活動が全国的に展開されている。一般にシリアネットと呼ばれるこのような活動に関わっている高齢者たちは、実に活発な活動を続けている。そして、講習を受ける側の高齢者たちも熱心にトレーニングに励み、高いスキルを身につけることのできる人も少なくない。そのような高いスキルを身につけた受講者が、今度は教える側に回って、他の高齢者たちのITスキル向上に貢献するといつよい循環が見られるのである。

この活動を活発なものにしている一つの要因が、高度な互酬性規範である。互酬性とは、呼んで字のとおり、人々が互いに報酬を与えあうことを当然とする社会に共有された信念である。「お互いさま」の精神と言い換えることができる。教える側の高齢者にとっては、教えることによつて同じ世代の人々のITスキルが高まり、相手から喜ばれ、さらには自分たちの活動に参画する新たな講師を得ることもつながら。そして、そのようにして講師になつた高齢者たちは、自分が苦労して身につけたスキルや知識であるがゆえに、どこが分かりにくいのかをよく心得ており、的確で効果的な指導ができるようになる。教えられる側にとつても、わかりやすく丁寧な講習でITスキルが高まり、

いずれは自分が教える側に戻ることでお返しもできるという気持ちで、学ぶことへの張りにつながる。このようにして双方の高齢者たちが、自分の行動が、自分と相手、あるいは自分たちの関わる活動全体にとって有益であることを認識しあうことで、シラネットの活動は活発に展開される。

このような活動のあり方は、互酬性のシステムを機能させることで、高齢者の持つ潜在的な能力を引き出す仕組みによって支えられているといえる。これは、地域のサポートシステム構築を考える上で重要な視点となる。サポートを必要とする人々の潜在的な力を地域の中で有効に活用できる仕組みを作り、それを資源としてサポートする側の貢献と交換するという発想である。

### 弱さをサポートする仕組み

前述のように、強さや潜在的な能力を前提とする互酬性の仕組みは、地域のサポート力を高める一つの重要な方途である。しかしその一方で、この考え方には少なくとも一つの問題点と一つの限界があることを指摘したい。

一つの問題点とは、ここで想定されている互酬性規範が、かなり限定的な範囲の中だけで機能するものであることである。サポートを必要とする者の潜在的な力や能力を引き出し、自立を促した結果として、何らかの返礼が返

される。そのようなサポートと返礼との交換は、サポートする者とされる者間で直接的になされるか、あるいは、同じ関心を共有する集団内で間接的に交換されるだけである。最初に述べたように、このような狭い範囲での相互扶助は、サポートの交換や流通が目に見えるものであるために、サポートする側とされる側双方に有形・無形の圧力となりかねない。最初に述べたように、われわれはそのような社会のあり方を嫌ったからこそ、社会の発展を手にすることができたのである。狭い範囲の互酬性規範のみを強調することは、時計の針を巻き戻すことになりかねない。

この問題点は同時に、このような仕組みの限界とも関連する。それは、この仕組みがサポート資源は、直接的であれ間接的であれ短期間に交換されるべきであるとの前提から出発していることによる。このような前提は、サポートに対して何ら返礼することのできない者は、結局この仕組みから排除されるか、あるいは大きな負債感に苛まれないながら、他者の情けにすがって生きるしかないという考え方につながりかねない。

この点について老人介護の問題を一例として考えてみよう。例えば、認知症の老人をサポートした結果として、その老人が自立し、サポートした相手、あるいは社会に何らかの貢献を直接的・間接的に返すようになることは考え



られるだろうか。それはおそらく非現実的な考えだろう。では認知症の老人はサポートされなくてもよいのだろうか。そんなはずはない。それどころか、そのような老人こそ他の誰よりもサポートを必要としているはずである。

相手が社会にとって有益な人材だからサポートする、いつか自分があるいは他の誰かを助けてくれることが期待できる人だからサポートするという発想から抜け出す必要がある。強いならば強いなりに、弱いならば弱いなりに、それぞれの個人の尊厳が最大限守られるようなサポートシステム作りこそが必要なのである。

そのようなサポートシステムの構築によって、狭い範囲での互酬性規範は「マイナスにこそなれ、プラスに働くこと」はない。先に互酬性規範を「お互いさま」の信念と言いつ換えた。互酬性がこの範囲にとどまっているかぎり、お互いさまの相手になり得ない弱者をサポートする仕組みを作ることはできないのである。

必要なのは、もっと一般化された互酬性規範である。これは、「お互いさま」の規範ではなく、「情けは人のためならず」の規範と言いつ換えることができる。つまり、サポートする相手からの自分や社会に対する貢献は期待できなく



とも、目の前にいる他者をサポートすることはいつか自分がその他者と同じように弱い存在になった時に、別の誰かからサポートを得ることにつながると思えることのできる仕組みが必要なのである。

### 地域をつなぐネットワーク作り

ではそのような仕組みを作るには何が必要なのだろうか。先に狭い範囲での互酬性規範は

マイナスにしか働かないと述べた。しかしその一方で、まずは限定的な範囲での互酬性規範が十全に機能する仕組みを作ることから始めなければ、おそらく何も始まらない。ただし、それと同時に、限定的な互酬性規範の機能している組織や集団、あるいは地域を相互に橋渡しする仕組みを作ることが必須条件である。

やはり高齢者介護を例にとり具体的に述べれば、第一に、高齢者を介護している者同士の横のつながりを拡大することが出発点である。第二に、その横のつながりが、ある地域の範囲内で一つの

まとまりを持ちつつ、同時に他の地域との連携がはかられる必要がある。さらにその連携は、別の連携との間に上位の連携を持つという階層的な連携構造を構築するのである。

自分たちの提供したサポートが、集団や組織、地域を越えた広がりを持つことを実感して初めて、人はより長期的な時間の流れの中での互酬性を信じていることができるようになる。人々の強さだけでなく弱さをも支える地域の仕組みを作るためには、実は地域の枠を越えた連携こそが重要な条件となるのである。

#### 参考文献

- Caplan, G. 1974 "Support system and community mental health" New York. Behavioral Publications(近藤喬一他訳)
- 「地域ぐるみの精神衛生」星和書店 一九七九)
- 「高齢者におけるインターネット利用とソーシャルサポートの可能性」仙台市のEIT講習会受講者及びびシニアネット会員に関する調査研究を通して、和気康太・茨城尚子・宮田加久子・浦光博・野沢慎司
- 二〇〇四 明治学院大学社会学部付属研究所年報 三四号、二五七―二七七頁

□浦 光博(つら・みつひろ)

広島大学総合科学部教授。一九五六年大阪生まれ。九四年より広島大学総合科学部に勤務。九九年より現職。専門分野は社会心理学(特に社会的認知、対人行動、自己過程など)。著書は、『支えあう人と人』(サイエンス社)、『人を支える心の科学』(誠信書房)など。